

選者：小泉凡氏
(小泉八雲曾孫・民俗学者)

選者コメント

2. 『新編日本の怪談』
ラフカディオ・ハーン著 池田雅之訳
角川書店 2005年

◆八雲文学の真骨頂ともいえるべき、来日後の再話作品の抄訳集。最晩年の名著『怪談』(Kwaidan)のみならず幅広い著作から妖怪譚、妖精譚、転生譚、怨霊譚などが拾われている。第6章には八雲作の妖怪辞典というべき「妖怪のうた」も収録されていて、八雲の怪談文学の全貌が見渡せる。



選者コメント

◆『怪談』から「むじな」「耳なし芳一の話」「雪おんな」など13話。『知られざる日本の面影』から「鳥取のふとんの話」、『天の河綺譚』から「鏡の乙女」、『日本雑録』から「えんま大王の前で」と「興義和尚の話」。全17話。八雲が海外の読者向けに書いた日本文化の説明などは省かれているが、そのほかは原作に忠実な完訳……なのに、子どもにも読みやすい訳文に仕上がっているとところが素晴らしい。

1. 『新編日本の面影』I・II
ラフカディオ・ハーン著 池田雅之訳
角川書店 2000年 2015年

◆八雲の来日第1作目の『知られぬ日本の面影』(Glimpses of Unfamiliar Japan)の主要作品を平易で美しい訳で紹介した好著。本書は八雲にとってルポルタージュ紀行の自信作であり、いまだ西洋の旅行者にとってはガイドブックの役割も果たしている。作品中に山陰地方のさまざまな怪談も散りばめられているのがとても魅力的だ。

3. 『クレオール物語』
小泉八雲著 平川祐弘訳
講談社 1991年

◆八雲研究の第一人者が、八雲の来日前のシンシナティ、ニューオーリンズ、マルチニーク時代におもに新聞や雑誌に寄稿した小品23話を訳出。八雲は12年間をクレオール世界で過ごし、グドゥー教やゾンビ信仰に関するエッセーを綴った。そんな小品からは、八雲の来日後に継続する超自然的伝承への関心が理解できる。

選者：金原瑞人氏
(翻訳家・大学教授)

4. 『怪談 日本のこわい話』
小泉八雲著 西田佳子訳
角川書店 2013年

選者：東雅夫氏
(アンソロジスト・文芸評論家)

選者コメント

5. 『怪談四代記 八雲のいたずら』

小泉凡著 講談社 2014年

◆来日後、初の著作となった八雲の『日本警見記』に続けて本書を読むと、子、孫、曾孫と小泉家に脈々と受け継がれる「旅」と「不思議」への切なる情熱に、必ずや心打たれるに違いない。「曾祖父はゴーストに出会うために旅を続けたのかもしれない」（本書より）とは、至言であろう。そして著者もまた、旅先で幾度となく曾祖父のゴーストと邂逅することになるのだ。驚くべき奇縁の連鎖よ。

6. 『小泉八雲 思い出の記／父「八雲」を憶う』

小泉節子・小泉一雄著 恒文社 1989年

◆小泉家のファミリー・レジェンドを、より深く知るために欠かせないのが本書だろう。八雲の妻と長男が、それぞれの視点から綴る、夫／父と過ごした、かけがえのない日々。日本語の出来ない八雲に代わり、近世近代の怪談本を渉猟しては、その精華を口移しに夫に伝えた節子。八雲が愛した焼津の地での一雄の回想には、土地の怪異も揺曳して……。



7. 『幽』第22号

「ハーン／八雲 Retold」

角川書店 2015年

◆八雲の『怪談』刊行からちょうど百年目となる2004年に旗揚げした怪談専門誌『幽』では、創刊号で八雲を特集し、それから十年を経た22号でも、ふたたび八雲に着目した。われわれ現代の「おばけずき」にとって、マレビト八雲の視点は、常に新鮮で啓示に満ちているとの思いからである。22号の特集では、小泉凡さんや佐野史郎さんらの顕彰活動が実を結びつつある現状をレポート。八雲と怪談をめぐる「今」を知るために。

リストの7冊（シリーズ含む）は、
田原市図書館で貸出・予約可能な資料です。
2016.10 作成